

『地域デザイン論』

山岸政雄

1 建造物のある風景

わたくしたちは、日頃の行動や価値判断の目やすを、いつも見慣れている自然や街の風景に置いていることが多い。例えば、山頂や平野に建てられた通信用のアンテナからは、自然を文明が利用するといった複合の方法や価値を知らされる。このように、建造物が風景に落とす影と、風景がひきたてる建造物の観相を遠近両方の視点から考えてみよう。

望見—建造物の見応え

どこの土地で暮らそうとも、ひとはその地域の建造物について無関係でいることはできない。

谷や川を渡る橋からは利便を受け、海に突き出した岬の燈台からは安全な情報が与えられる。あるいは、遠くに望み見る発電所の煙からは電力を供給中であることが、また、野球場の照明からは試合中であることを知らされる。

これらはその地域の生活構造を知見するうえで、かなり正確な情報となる。ましてナイターでは、試合の終了にともなう交通の混雑さえ予想するわけで、二重に生活と直結した情報でさえある。

このように建造物の見応えには、構造別、用途利用別同様に、望見によって生まれる。情報価値のあることを知っておきたいと思う。

もともと建造物は、建てたり、仕組んだり、築いたり構えるといった、造形行為の総体にかわっているために、人工の環境を構成するほとんど全てに関連している。

造形行為を説明する内容は、まず、単品と量産品、木製か鉄製か石造りの違いに類別される。加工段階では、鋳造と溶接、あるいはそれらを彩ったり、装飾を施すといった生産の枠組みに支えられている。さらに時間の経過につれ修繕

や修復の必要性が加わる。それゆえに建造物は、全智にわたる文化の形態といってもよからう。ちなみにこの仕事によってなされる工事を建設工事といい、橋がかけられ、ダムが築かれることが連想できよう。

ところで、建造物の望見による見応えは、先に述べたように、その成立過程にまつわった文化情報を読むことに始まる。

橋を例にとれば、海や山、川のような自然の地勢や景観の状態を考慮に建設される。やがてそこを行き来する人たちによって商取り引きが行われたり、さらには、習俗や芸能、言語も交わされて文化が混成されてくる。ときには、植物や動物の交換も行われ、衣生活や食習慣に変化が生じたり、住生活も影響を受けよう。

また、集団移動の容易さは時として統治のきっかけとなった歴史を我々は知っている。

このように1本の橋のたもとから、新しい文化の花が咲き、環境が再生される可能性が予見できる。

ぎっしりと埋めつくされた、東京や大阪などの大都会に見られる建造景観も、見応え、読み応えの対象となる。ここでは閉息状態における景観から、程よい宅地化率を推察するといった反面的なモデルとなっている。さらに都市の美しさのように、広く軟らかい視点も加味され照応の尺度となる。建造物から遠ざかり見据えるというもうひとつの望見価値は、都市美の例もそうであるように、さまざまなイメージを描き見ることである。

ひとつは、生まれる以前から持っている体質、性質によって、現実と結ばれるイメージである。もうひとつは、ある体験をきっかけとして、どのようにさまざまなイメージを知見できるかである。

話には聞いているもののいまだ見たことのない建造物であろうとも、あるいは、絵はがきで見た景観や建物のいづれにせよ、そこには現像を呼び起こす情報によって体系化される、認識の世界が待っている。

たとえば、時計台といえば安田講堂（東京大学大講堂）のそれや、築後100年余の札幌市郷土博物館時計台（旧札幌農学校演武場）を思い出すであろう。しかし、いまそこに立って時刻を確かめている人は少ない。どちらも時計をしつらえた塔機能は薄らいだ。開拓の時代や、国家枢要の人材養成組織として重ねられた事象が想像を伴って表象と化し、シンボルとして見据えられるようになったからである。

ところで、私たちがいつも見慣れている建造物のある風景が、いつの間にか変わっていくのは、科学技術の進歩と関連している場合が多い。

通信科学の発達は、岬の燈台からも光束や遠目に効くサイン機能を不用なものにする。ここでは、海と陸と出合いの様式と燈台の持っていた象徴性がすっかり変わるようになってしまう。

もうひとつの例は新幹線列車である。1964年10月に東海道新幹線が営業を開始してから20数年が過ぎた。東京と新大阪の間を3時間10分で結んだ巨大建造物も、その後の山陽、東北、上越新幹線の登場で、日常の交通装置としてすっかり日本人の生活に溶け込んでいる。当然の成り行きとして、特待性や珍しさは消え、矢のごとく疾走する勇姿への感嘆と、乗車をしたことの話や価値も失われた。そして新幹線は、富士山を背景にして走るパノラマ風景としてモニュメンタルなものになった。

だがしかし、このイメージの転移と拡張は国内のみにとどまらない。1981年に開通したフランスの超特急TGVは、パリとリヨンの間を、最高時速380km 2時間40分で快走している。これらの情報とのつき合わせによって、情報風景とでも言われるべきものが生まれ、新幹線のみであったメッセージの有利性はより相対的に拡散する。

これからは、風景の中での新幹線の見応えの場は、絵はがきの中に思いで景観として納まっ

てしまうかもしれない。そして、いまや人々のイメージは通常時速400kmを目指して開発の進んでいる、リニアモーターカーの移動景観にありそうだ。

こうしていつの時代でも、技術の推移、進歩変革に伴う建造物の変化は、イメージを構成する刺激秩序にも影響を与えていく。

視点を変え、重ねて風景の様子をうかがうと、建造物の有り様によっては、緊張感のように直接計り難いものにまで影響を及ぼしている例が以外に多い。

高速自動車道についても他の高速輸送システムと同様に、張り詰めた感じの風景が浮かんでくる。2点間を最短の距離と時間で結ぶことのイメージは、弾み交うものである。そこでは、通ることや差しかかる、経由して過ぎ行く、といった概念や乗り過ごす、行き違ふといった見えない経験からの感性が失われていく。

また、空港での望見とイメージの描き出しは、発着地点間の距離を、心理距離に仕立てることに重きがかかる。ターミナルにおける独特の離別感はそれをよく表わしていよう。

空港施設は、鳥のように空を飛ぶことの願いを実現した、巣立ちと帰巢の原風景といえよう。

さらに、地上に望見できぬがゆえに気付きにくい建造空間は地下街である。ショッピングセンターの性格を強く打ち出し、なおかつ完全な地下形式となっている。ヨーロッパやアメリカに見られるような、ゆとりを感じさせる地上一部開口式はほとんどない。

代表的なものは、東京の八重洲地下街や大阪の阪急三番街、神戸の三の宮地下街、名古屋や福岡の地下街などである。いずれも大都会のキャラクターとして発展しつづけてきた。

この土地の効率利用は中規模都市における中心部再開発にも及んだ。新潟市の西堀ローザ地下モールも一例であろう。ここでは、防災計画から美観まで、よく調和のとれた地下風景が演出されている。

ところで地下にはもうひとつの顔がある。それは、地表の下という密閉された恐怖の空間が、わが国にはまだないが、核シェルターのような

最も安全な空間に一転することである。建造風景における秩序が周囲の状況を常に反映している証しといえよう。

このように、私たちの生活空間は、建造物とその周辺から発せられる造形言語に導かれ、絶えず呼吸していることを知り得た。見応えのある建造環境は目に触れない様子の望みにある。

風景になじむ建造物

建造物はしよせん人間がつくったものである。したがって、建造物が使われる過程において、人間や社会の狭間における愛憎模様が生まれても不思議ではない。

必要に迫られて建築された高層なビルディングが、後背地の山の手住民にとって、美しい風景を眺める権利を奪おうといった、予期せぬ問題を生むことなどである。

このたとえば、社会の変化から生まれた建造物が、風景や景観を介して愛憎相半ばをする過程で、その目的や意義が評価されるなじみについての典型的な例となっている。

もっとも、愛憎は感覚に類するもので、その結果に至るまでの心の置きどころや、内に秘めた種類は巾が広く、憧れから好き嫌いや同情、差別まで拡がっていく。風景や景観になじむとはその一面であって、建造物と風景の在り方をしばしば説明する要因となり得る。

ふつう、嫌われたり、愛想尽かしされることを承知で、建造物を意図することはない。しかし、時として、先の眺望のように、他に遠因を及ぼすさまざまな例が、現代社会には多くなってきた。

戦勝国が建てる巨大な戦勝記念碑は、被占領民の心を痛めつけるであろうし、また、広島原爆ドームのように、修復をせずに、被災の原型をとどめることによって、戦争忌避の象徴となっているのは、人間の愛しみが、具体的に移入されているなじみ模様といえよう。

社会資本の充実に伴って、善意や厚意、または合意によって建造された住民のための施設も最近では大変多い。そこでは、建造物を使用する過程で発生する音や光、臭いが環境絡みで好悪の判断を誘うこともしばしばある。

たとえば、近隣公園のプールから湧く歓声で静けさが破られたり、過度の夜間照明によって夜分の安息が妨げられるなどである。この先、人口構成が老齢化するに及んでの新しい環境権になろうとしている。

建造物によって時代の有り様を統一的に示威し、そこを訪れる人をして、感嘆ときめかず演出もなじみの積極的な断面といえる。

愛知県犬山市の博物館明治村や、同じく人間博物館リトルワールドにおける世界各地の復元家屋群は典型的な例である。明治村では日本文化の黎明に接することができ、リトルワールドは異民族間の建物の違いを散見しながら、日本文化との比較ができる。

江戸期にさか昇った復元建造物群は、金沢市郊外湯涌に集成された江戸村である。そこでは時が止まり、建造物なじみはタイムトンネルでの出会いによって始まる。

また、空間の風景が仮現された状況においても、もう一つの自分のイメージに触れる場が得られ、なじみを経験できる。

東京湾の千葉県浦安に出現した東京ディズニーランド（25万平方メートル）が、さらに、最もよい例といえよう。

おとぎの国は、想像にかかわるイメージの扉を開き、誘い出す装置や仕組みによって成り立っている。楽園の入館者は、訪れた何時間かまたは何日間かのうちで、日々の暮らしによる欲求の果てし無い夢を、装置の助けを借りて清算し、解放感として見返りを掌中に収めることになる。装置として仕掛けられ調整されたものは、競いや闘いの模像（シミュレーション）であった、まねごとや演技空間のように、知らぬ間に代償機能が果たせるように建造物が用意されている。

遊園地といわれる建造物の役割は、このように想像や心象にかかわるイメージの内発にヒントや助力を与え、それはまた、建造風景としてのなじみの演出にもなっている。

ところで、文明の恵みにもかかわらず一方において疎外された風景が多くなってきたものは何故だろうか。

人間尺度を優先した気くばりと工夫されたデザインや、善意によってできた横断歩道や地下道は、現代社会の恩沢である。しかし、時としてそれらは地域の人たちに十分なじみ活用されない。

それは、建造物を利用する幼児や青少年、老人あるいは障害者といった行動と感性の異なりに、共通して対応できぬことが第一の原因である。

理由は、進行する車社会の景観造成は日々に変わるが、主役であるべき市民がこれで余り関心を示さなかったことにある。

そんななかで、歩道橋のデザインで環境と調和し、都市になじむ修景を与えたのが、横浜市の野毛歩道橋（柳宗理デザイン）である。また、金沢市の犀川にかかった御影歩道橋は、いくつかの着想に伝統都市の模様を生かす試みがなされ評価されている。

色彩や建造物のなじみの良否も、都市や風景そのものの、価値の助長につながるというよい。

色彩イメージの明快な町ほど人々を惹き付け、親しみを増やしてやまない。白いヘルシンキやベオグラード、赤いシェーナはいつも例に上がる。

近代都市に彩色の解け合いを計画したのは、ドイツの建築家、ブルーノ・タウトであったが、都市環境の快適条件に色彩を考慮することはなかなか難しい。たとえば、緑色をきらいであるというひとが、新緑の風景を嫌うとは限らないからである。

ことに京都や金沢のように、瓦の黒さや茶色でやわらかな木色（もくじき）のそろった町の色と、現今の極彩色との間になじみを見出すのは難しい。

風景になじむことの周りには、安らぎや、解け合う、懐（なつ）くといった、親しみ近づく感情が建造物から沸き起こることを理解しておきたい。

建造物と公共の風景

建造物はある目的をもって建て築かれ、所有や管理は個人もしくは公共に属している。そし

て、これらのたたづまいには社会一般、つまり公の財としての風景や景観の価値が問いかけられよう。その理由は、街景を眺め巡り見るときに、生理、心理的に苦痛を感じるような建造環境は、暮らしの利益を損なうといった常識が働くからである。

しかし一方において、私権という享有権が主張される場合もしばしばあって、現実の公共風景の保全修景は容易ではない。

これまでも、住まう権利のひとつとして、風景や快い景観を肯定する思想は、産業社会の確立と呼応しながら、ヨーロッパ、アメリカで景観術として確立されてきた。

また、今世紀に入ってから、中頃までに、都市の機能や空間が人間の動きにつれてどのように変わるかを、都市生態の立場から観察する人達も現れた。それは、今日の景観思想にも引き継がれた。アメリカの都市計画家ケビンリンチによる方法論、都市のイメージにおける個別性、構造的、意味性に基づく分かり易さの解明とその手法が提示されたことはよく知られている。ランドマーク（堺標）もそのひとつである。

一方建造物によって公の風景が改められ、つくり出される場面では、政治による鼓吹や技術レベルの実証といった希求欲が常に顔を出す歴史があった。

今日のように、人口動態や、政治、産業形態に敏感な社会では、常に諸感覚のバランスを背景とした景観が、公共のものとして受け入れられよう。

都市の風景や建造景観は、筆鋒犀利な文学者にとっても格好な対象である。

明治の終わり頃の東京を評した森鷗外は、其処此所で家を立て直したりしている様子をいつも晋請中という、都市化の波を明察している。

また、田山花袋は「東京の30年」を書くなかで景観の移り変わりを回想した。そして、いち早く自動車と都市の在り方を説いて、輪禍の恐れを指摘したのは幸田露伴である。公共の風景として出現した自動車という移動景観が、道路の拡幅を促す都市の改造に大きくかかわっていく先を鋭く見抜いていた。

あるいはまた、都市の利便と景観の有り様に触れて、公機能の大切さを比較したのは永井荷風である。1907年、アメリカを去る荷風は、ニューヨークの瓦斯灯（ガスとう）に記された町名表示を、亜米利加（アメリカ）の市街で最も便利なもののひとつであると言っている。整然とした景観を、東京の複雑さに重ね見て、評価を与える先見性に驚かされる。

いつの世も、風景や景観は時と共に移り変わり生きているが、民族学者柳田国男はこのなかに、文化を単調にする現象のあることに気付いた。その現れは、1923年の関東大震災の後に、東京郊外に続々と建てられた家々の屋根にあった。屋根はペンキで同じように塗られ、都心の勢力が単調に伸長しつつあることを読みとったのである。

同じように、風土論で知られている哲学者和辻哲郎も、不整合で生態的美しさのない町並みを「錯雑不統一」と言った。昭和初期の大都市の変化と混在ぶりが浮かんでくる。

建造やその景観のあり様を心配して、長期にわたる実践活動に及んだのは、地理学の黒田鵬心である。その運動は、大正初期から40年の長きにわたっている。都市の美装と建造物の変遷研究と同時に風景協会をつくったり、1943年には雑誌「風景」を発行するなどその活動は多岐にわたっている。

このようにして、文化の視点から注目されてきた公共の風景は、それが環境の情報として、直接都市を育み左右する共通する分母と認識されるようになった。ついで高度に発達した都市自らの蘇りが始まる。

蘇りは、機能的に優れた都市は美しいといった理念よりも一層多義多重にわたるイメージの認識過程をはさんで展開される。

近年各地に出現しつつある、巨大なショッピングモールは、その意味において、町の賑わいや界隈を織り込んだ胎内景観として蘇りと公共風景のモデルとなる。ここでは、建造物の動きやその心を見る目が、まず、安全、快適、適切といった主要な情報から、より細かな情報まで幾重ものネットを通過しながら顧客の了解を得

る。従って情報の演出や解析の方程式が細微に欠けるとき、イメージは貧困化して、客足は遠のき、公共の風景ともなりにくくなる。そして問題は、より拡張した都市に展開するほど通有のイメージを蓄えることの難しさにある。つまり、作為やアクシデントによって、目的や計画がしばしば変更されるからである。

だが、意図した建造物からの発信の質や量の主体性は、建てつくる側の倫理の問題として逃れるわけにはいかない。

公共の財としての建造物の風景は、こうして網目かけられ、通有の価値をもったイメージに構成されていく。それは結果として建造物の規模や町に占める割合が、まさに一定の地域のイメージを形成する主体的情報とならざるを得ないからである。

ことに、高層ビルディングや住宅団地、塔や橋、運動施設、大学のキャンパスからの情報の発生と影響力は強いものがある。そこではさまざまな色や形、その組合せや材質感が情報源となっている。

たとえば、大学のキャンパスは市街地型の場合、地域に与える影響はことに大きい。キャンパスデザインは、大学の制度と慣習の配列として視覚化されるイメージの先取りであって、都市デザインと不可分だからである。

日本建築学会で調査した、各地に残る明治、大正、昭和（1860年～1945年）の主要な建築総覧によれば、京都大学にある144件の対象となった建築物は、京都市における類例の1割を占めている。東大、東北大、九大においてもその率は高い。キャンパスが都市に落とすイメージの大きさを知らされる。

地域のイメージが歴史性を帯びているゆえに、公共建造物の風景や景観における通有性が注目される例として、金沢をあげてみよう。

金沢は第2次大戦の戦禍に見舞われることなく、400年の歴史を重ねてきた。人口42万人の北陸の都市である。ここ10数年の間に、主な公共建造物はほとんど立て替えられるか、または新築された。たとえば金沢市役所、金沢市立図書館、金沢市文化ホール、石川厚生年金会館、

石川婦人会館、石川県立美術館、石川県立野球場などである。

一方、旧第四高等学校本館や、旧金沢美術工芸大学の赤レンガ館など、市内に散在する伝統的建造物の保存にも理解が示された。また、加賀藩の遺産である用水路の修復も盛んである。そこでは、金沢らしさといった都市の自立を説明する情報がうまく仕組れるように配慮されている。

したがって、市民はこの公共の視覚領域で、快適さや親近感とどのように向い合うかを、風土と重ねたイメージで選択しているといえよう。

このように建造物は、都市の貌（かお）を形づくり、風景をはぐくむものとして、その在り方がますます注目されている。

2 都市景観と建造物

都市景観を構成している建造物を説明するために、最も大切な視点のいくつかを具体例から考えてみよう。

都市に大勢の人間が集まって住むようになると、心をいやすために、屋上庭園や坪庭をつくったり、窓辺に観賞植物を並べるようになる。都市特有の景観はこうして出現する。したがって、これらを支えている建造物の意味や有様の考察は、都市の素顔に出合うことでもある。

都市の発達と建造物

今日の都市問題は、ひとえに、人間の成長と、学習の場としての、都市の有様にかかわる、人間尺度からの問いかけである。

したがって、都市の発達とは、それぞれの風土環境に適応してゆく集住の仮定であり、住まい方の証である。それはまた、建造物によって、発達の有様が実在化してゆくドラマでもある。

適応、不適応の萌（きざし）や気配、よろす姿は、土地に建てられた家屋や橋、倉庫、道路、公園、寺社、港などにいたる、あらゆる工事を施したものとしての建造物をよく見ることににおいて、すべてにわたって明らかになるとさえいってよい。

だが、そう言うものの、なかなか判読は難しい点もあって、さまざまな領域の研究協力を必

要としている。

それは、科学技術の比類なき進展が、都市建造物の表情から、発達の手順、順序を読みとることを複雑困難にしつつあるためである。つまり、エアコンディショニングの発達は窓なしビルディングを可能にしたが、それゆえ、画一無表情の建物が何に使われているのか、外観だけでは判断できなくなったことなどである。

巨大な石油コンビナート装置や、通信塔は、都市エネルギーの供給や情報を保証する象徴としても頼もしいが、うらはらに、都市災害や機能停止をも予見させているわけで、二重の意味を含むのが、今日の建造物景観である。

今日、インフラストラクチャーといわれる、都市基盤装置が、都市の発達を考える視点として、注目されているゆえんもここにある。1977年、思いがけなく経験したニューヨーク市の大停電では、眼前の暗黒街がハドソン川はるか上流の発電所と不可分であり、都市を読むことの大切さを改めて知らされた。また、スリーマイル島で起きた原子炉溶解（メルトダウン）のTV画像からも同様な恐怖と意味を読むことができた。

そしてもっと皮肉なことは、それらの装置が、他の都市のエネルギー源を支えるために建造される場合、風景としての建造物の意味と心証は、二重、三重に重苦しいものになる。

建造物を、ある都市の史実と発展過程に関連づけて、文明や文化を問い直すためには、その町に、なるべく長く住まい暮らすことが最良の方法である。しかしながら、生命と時間の制約を受ける人間にとって、全てにわたって住まい暮らすことは不可能である。それゆえに、われわれは、さまざまな記録の方法、技術、たとえば、写真と測量による推測や推計の観察手段と体系を持つようになった。

さらに忘れてならないことは、想像（イメージ）を加えることによって、次々と湧いてくる想像や意欲を飽くことなく吸収し、都市への理解を深めてきたことである。

壁の向こ側を知るには、周囲の様子や気配から察して、逞しい想像を働かすことであろう。

ベルリンの壁も一例である。多くの都市をつぶさに学習して行くことによるのみ展望が開けてくるゆえんである。これまで揚げた建造物のある都市も、歴史の長さにおいて、人口の規模において、政治、経済、文化の多様さや風土条件の異なりにおいて個性をみせてくれた。つぎに、これら原風景の中にある虚の風景や、原風景の成り立ち、構成、心的象徴などについて、都市の発達と併せながら適応の姿を追ってみよう。

建造物の色彩、記号環境

どこの町でもよい。高台や高層ビルから市街を眺めてみよう。赤い屋根、青い住宅ビル、灰黒色の瓦屋根の間に建ち上る黄色い商業ビル、広告塔や通信塔、ドームや伽藍に橋など数えきれない建造物が、大地の起伏にそって見え隠れする。まるで、モザイク画を見ているようである。私たちは日常、このように詰め合わされた空間の中で都市生活を送っている。したがって生活者としての事実や実感の確認は、この情景を見ながら、あるいは自動車の騒音を聞かされるなかで、町の気配や、なりふり、ありさまに気を配り、用心深く判断するのが常である。事実、見ることや、聴くことの健全な判断力を社会生活の約束基盤としているものにとって、近所に突然現れた真赤なビルディングや、一風変わった形の建物には戸惑うし、その意味の何たるかが解せぬままに、反感や抵抗へ進む場合も多い。それゆえ、都市を構成している条件の要素や状況に接して観察し、建造物が景観の意味している内容と、事実との照合を的確にしておくことが大切である。

美しい町の色彩は、回想的で理想郷へつながるイメージもあるが都市環境阻害の開口部ともいうべき、マイナスのイメージにつながる場合もある。都市の美しさには、感性和経済の価値をめぐる因果がみられ、調和を欠いた町は、汚れ活力が低下していくものである。たとえば、私欲の行使と、平衡感覚の相いれがたいものが、色彩現象となって現れたときである。黄色に塗られた建物は、控えめな色の家並みを、その3倍も抱え込む対比効果によってのみ目立つがゆ

えに、黒灰色の美しい薨の波を犠牲にする。

粗悪な広告物や、表示類で塗り込められた町では、人びとの感情や情緒までが、過剰な欲望喚起の対象にされてしまうのも道理であろう。

建造物にみられる記号性は、ある種の先駆概念、つまり、あれは学校で、これは展望台といった心構えをもって、接することのできる確かさの精度であろう。そこで先験的な思惑と現実がくい違ったりすると、建造物によって組み立てられている部分のイメージが、全く別のものになってしまう。

たとえば、遠くからは、美しかろう街を俯瞰する展望台と思っていたところ、実は監視の塔であったような場合である。そのとき、その都市を訪れたひとは、何か薄気味の悪さを感じよう。イタリアの話になるが、詩人ダンテの言う「美しい塔の町」として名高い、サンジミナーノに林立する多塔は、家門権力の象徴ではあったものの、防塞としての実用性に乏しかった。これは、二つの目的が論理的に整合しないまま記号情報が発せられた例であろう。

文化としての順応による建造物の記号変換の例は、第2次大戦後、全国に誕生した新制大学の校舎にみることができる。つい最近まで、北大から鹿児島大学に至る本校や分校の学府施設は、旧日本軍の兵舎や兵站（へいたん）建造物を転用していた。金沢美術工芸大学旧校舎は、陸軍兵器庫を転用した典型例であるが、戦争から平和への絵に描いたような記号変換の例であった。

文化とは、その時代を担う人々の順応や適応の様子である。軍隊という武装集団の施設が一夜にして平和の象徴として大学に変化するありさまも、日本の国民性に根を置いた、先験的記号環境であろう。

色彩や記号環境は、このように、何かの肩代わりとして説明しようとする認識価値のアナロジー（類比）として、注目されるようになった。

建造物の複製複合景観

建造物や、町のありさまを、素顔に戻して見るように努めようとするとき、そこに、もと（本、元、原）のものと同じものがつくられて

ゆく、再現による複製現象と、単一に対して、二つ以上のものの合体である、複合景観を見つけることができる。たとえば、標準規格化された、沢山の集合住宅や、アパートメントは、唯一のデザインをもとに、同じものが多数つくられ、並べられ、街区を形成している例である。

また、同じ形の郵便ポストや、電話ボックス、ゴミ箱などのサービスポイント、あるいはまた、街燈、ベンチ、時計塔のような、ストリートファニチュア（街路施設）も、複合された建造物として機能している。

合体されたものの簡単な例は、柱と梁（はり）と壁、屋根の出会いが家を形づくることである。また、機関車と客車の連結によって、列車という新たな複合建造物が生まれる。夜間照明塔の設けられた野球場には、日没後も昼間の状態を保つことで機能の複合による斟酌現象が生まれる。このことは、現象学の流れを汲む哲学者、ハイデッガーによって思索されていて、「景観は元来自然を斟酌したものであって、屋根つきの複合物は雨天を斟酌している」と考えられた。

一方、複製や複合の生成出会いは、都市生活や景観の形成にとって現象を超える現象を生じかねない。どこの都市も没個性になってしまったといわれることの原因に、一律に既製品化されて配られる、広告塔の存在がある。一口に広告看板といっても、スタンド、立て掛け、吊下げウインド、突き出し、軒先、垂下げ、広告塔、屋上サインなど、その数は多い。これらは、建造物との複合の機会を獲得するや否や、夥しくも過剰なまで拡がりをもって、景観を席捲する。

複製と複合現象が、同時進行することのような条件のもとで、調和を欠いた選択が進むとき、建造物や街の様子は、ドラキュラ症ともいえる、病める街となってゆく。快適さを指向する都市景観の蓋然性の前に現れた文明の怪といえる。

複製は、オリジナルが別人の手で同じか、ときには、ほぼ同じ技術手段によって模倣再現される場合、これはコピーと呼ばれる。同じ作者の手になるときはレプリカ（写し）といわれている。したがって、模写や模造をも含むことに

なる。複製建造物が、常識という、よく整序された階層秩序にあやかって模倣再現された例に、富山県小矢部市の東大安田講堂模倣校舎がある。この市では、公民館など、他の公共建造物についても、一橋大学講堂といった有名建造物のコピーがとり入れられ、話題を呼んでいる。

建築家でもある市長は、おそらく優れた建築に統合される真、善、美を東大安田講堂や、一連の有名建築に見出し、市民に清新な知の組み替えの機会を贈ろうと考えたのではないだろうか。

それはまた、一方において、富山県砺波平野に忽然と現れた安田講堂のコピーが、唯ひとつしかないがゆえに持ちつづけた、光輝にも似た尊敬を二分したことでもある。オリジナルのみが持ちうる尊敬性がコピーの出現によって失われるという、今日の複製時代を、根本的に象徴している建造物である。

建造物における複製と複合の問題は、パロディ（原作をもじる）をもつという点で、物的範囲から、その属性や内容が、捨象、統合、昇華され、更に新しい概括を可能にし得るところに、建て造られた文化を読み取る意味が生じる。ジョイント文化といわれる、今日の組み替え、変換、互換が生む、都市の視覚現象のちぐはぐさは、元来、商工業の交換場所たる市場都市と、農村との境界を持たぬまま「都市」として育った事情によるものである。

建造物の情念、遊戯、イメージ

情念や遊戯、イメージにまつわる概念が、建造物や都市の原風景を説明する動機となり得るのは、それぞれの建造物の気配や姿の中に共有されている素材が、多分に知覚され得る対象として、人間の思考や行為をよく表す質を持っているからである。言い換えれば、情念や遊戯性、イメージを生む要因とは、原風景の持つ意味、つまり、何らかの具体的表現の中に現れてくる志向、目的、こころのようなものを指して、透かして見る世界というべきかもしれない。たとえば祭祀（さいし）にまつわることなどである。神社境内の神殿、鳥居、繁る大木、めぐらされた玉垣の組合せの中にある、晴（はれ）の建造

空間がそれである。

周期的にとり行われる祭りは、祭具がしつらえられ、歌舞音曲が演ぜられる。獅子が舞い、境内相撲、能が奉ぜられる。なかでも、御輿（みこし）や山車（だし）は、神霊をふるまう移動建造物といってもよく、その高い装飾性は、非日常的ななかに生まれる情（こころ）の風景を演出する装置としても、すぐれた建造物である。

また、家々の並ぶ町空間には、表通りの晴れがましい空間と、裏通りにみられる、日常でのおおやけではないという意味の「け」の場があって、二極構造の中で町に心の眼鏡をかける面影を脳裏に刻む心象知覚の場である。

もともと、日本の都市については、いわゆる多数の聚落（しゅうらく）が自然発生的に農耕を基盤に拡がり、その要塞や衛戍（えいじゅ）地区分を持たなかったゆえに、日本に都があったといえるか疑わしいとマックスヴェーバーは指摘した。したがって、発生する聚落の諸形態や生活様式は、不定形で入り組み模様となる。そのことが、交換の場をつくり、極めて情念的、かつイメージや遊戯性に満ちた空間を導き出した。情念は、快適であったり、不快な様態の気持ちをつねに情（こころ）にかけ思っていることから起こる、極めて主観的な精神活動といえる。それゆえに、建造物に見られる情念観は、時として、格子戸をくぐり抜けて見える街角のように、身体感覚空間から、修学院の借景にみられる。高度な智慧の情景構造を持つものまで多様である。また、界限（かいはい）といわれる、新宿や渋谷の都会の賑わいからくる都市観相も、情念の世界を象徴しているものといえよう。

都市景観は、一方において、知覚の遊びとしての遊戯性のある空間をそこに持っている。たとえば、城下町金沢に多くの残る迷路のような街路がそれである。通景を塞ぎ、幅員3mほどの露路を抜けると、広見（ひろみ）といわれる升形広場に出て、一瞬にして視界がひろがる。家並の織りなす遊戯交換である。金沢ではこれを七曲りや、迷（まよい）小路といい生活者の

誇りとしている。

都市の建造物に現れる遊戯性の探りは、遊戯論の立場からも十分な対象となる。今日の遊戯論は、オランダの文化人類学者ホイジンハによる、人間遊戯人（ホモルーデンス）論や、生の刺激としての遊戯構造の分析を試みた、ドイツの哲学者オイゲンフィンク、または、遊戯性の要素を、競争、偶然、めまいに集約分類し社会の特徴を抽出したフランスのカイヨワなど多彩である。

なかでも、カイヨワにおける遊びの範疇には、都市人の行動選択と建造物の様態が、社会発展の鍵として相関を持つであろうことを予見する因子を含んでいる。

今日、タワーという展望施設が各地にある。かの夏目漱石は、遊戯的開花としての物見台にいち早く注目していた。そして、現代の塔は、眺め遊ぶ物見の一方、都市の様子をうかがうといった、一望監視面の裏面を持っているのが特徴である。この現代の物見櫓（やぐら）こそ、建造物の情念や遊戯のイメージを象徴しているといえる。

都市景観と建造物

都市景観は、人間が住まい暮らしている有様が、集積して見えていることである。これまで、構造物が送り出すいろいろな情報を仮説し、状況を照らしながら、建造物景観の意味を説明する公式を探ろうと試みた。

さらに、ここでは、増殖された建造物景観が、都市の時代にあって、どのようにデザインされ、創造体として客観妥当性のある対象となっているかを、個々の偶然を避けながら考えてみる。

建造物の増殖過程の解りやすい例は橋である。聚落が発生し、対岸との交流が、渡し船（舟）から橋に代わったとき、架橋による全く新しい景観が出現する。さらに、外敵から橋を守るための砦（とりで）が築かれることも、歴史上ままあって、景観が増殖されていく。

こうして、建造物は、人間の希求する条件を満たしながら補完を繰り返し、次第に、それ自体に内在する発顕性によって、都市景観として成長し、かつ、都市人を支配するに至った。信

号や多くのサイン装置を頼りに生活する都市の様子が一例である。

だが、この図式は建造物と景観の客観妥当性の全てを語ってはいない。もう一つの必然つまり建造物をめぐっての人間の心は、炯眼（けいがん）に満ちて景観を読み、かついつくしんできた。

外国の例になるが、ユーゴスラヴィアの作家、イヴオ、アンドリッチは、故郷ボスニアの古い橋の上を去来する人間の運命を400年にわたって描き、ノーベル文学賞を得た。この作品、「ドリナの橋」では、ドナウ川支流の深い谷に架けられたアーチ橋が、歴史の証人として、国境の町の諦観（ていかん）と悲哀を見ている。そこでは、橋が、高欄が、弧を描いたアーチが叙事文学の対象として息づき創造的景観となっている。

景観は、こうして配列された建造物を通じて、人間の支配と内発との両極価値の転換を始める動機を持つ。

そこで、都市景観という造形にかかわっての、支配や内発の媒介に、デザインの視座を据える必要が生ずる。なぜなら、デザインと言われる行為の総体を構成している理念は、目的に対する考察を順序よく、計画的に、造形の手段をもって表現することだからである。

高密度集住環境の整合は、このようなデザイン思想が最も有効で、都市デザインあるいは、建築デザインに期待が寄せられる。

東京都南多摩郡の新都市、多摩ニュータウンの歩みは、都市景観と建造物整合の歩みであろう。1963年新住宅市街地開発法を受けて、1964年多摩ニュータウンはスタートした。郵貯や年金の還元融資を受け、公共投資はこれまで一兆円に上った。鉄道を敷き、多摩川の水を導いて、徹底した住区サービス本位の都市づくりが行われた、電信、電話、下水道の埋設は、日本の都市デザインの夢を実現している。現在は人口11万人で、快適環境と都市景観デザインが住民に与える真の影響評価が待たれている。同様に、研究者を主に13万人の人口に達した筑波研究学園都市や、10万人を目途とした、新潟県長岡ニ

ュータウンも、前者にあっては、自由な発想と多様な価値感を充したデザインが、後者にあっては、世界に類のない利雪都市のデザインが期待されている。

また、来る世紀に向けては、テクノポリス（技術集積実験都市）の実現が各地に持たれ、ここでも都市景観のデザインが注目されるであろう。

都市の景観をめぐっては、1964年頃の京都タワー論争から、皇居前の超高層ビル是非論、さらに町並保存運動から眺望権問題へと、都市の拡大と並行して視点も移行してきた。今日では、景観アセスメントの手法開発や、やがて到来する高齢化社会の中で、都市景観と建造物の再定義が希求されている。

（以上）